

事業名	多様性を生かしたパラ人形劇×ダンスのワークショップ・発表会
【当初計画の事業目的(取組課題)と実施効果】	
【事業目的・取組課題】 ◆障害者の芸術参加の拡大 地域で芸術活動を継続する中で、「自分が楽しめるものではないのでは?」や、「料金、内容がハードルが高そう」、「会場までのアクセスが厳しい」「耳がきこえないことで、ワークショップなどについていけない」など、障害が理由で芸術活動への参加をあきらめたり、外出自体をあきらめて引きこもりがちになってしまうという声が寄せられます。 今回、そういったハードルを感じる方が、経験の有無や障害の有無に関係なく、気楽に自分の表現を深め、発信する場所を作ることを目的します。 内容として、参加者の個性を生かした人形劇・ダンスのワークショップと発表会を実践します。ダンスや人形劇という、ことばに頼らず、その日にふらっと初めて参加できる場があることで、障害者参加の可能性を広げます。 また、「参加者の個性をそのまま作品化する」ことで参加者や鑑賞者それぞれが自身の持つ個性をより肯定することを目指します。 ◆障害者の参加可能な芸術の可能性を広げる 川崎市内で、障害者の参加可能な芸術イベントは多くあります。しかし、障害のある当事者が舞台表現活動に参加出来る場まだ少ないと感じています。今回、他ジャンルの芸術活動と協働することで、独自の表現活動を体験する機会となり、障害者芸術の新たな表現の可能性を広げます。 【実施効果】 1, 参加者の個性を作品を通して肯定する 人形劇ワークショップ、ダンスのワークショップそれぞれに共通することは、「参加者の個性をそのまま作品化する」ことです。障害者＝つらい、かわいそうではなく、参加者の持つ身体的特徴や個性があるからこそその新しい芸術表現を発見し、発表することで、参加者や鑑賞者それぞれが自身の持つ個性をより肯定することを期待します。 なお、人形劇ワークショップで使用する素材は、軽く扱いやすい素材(布地、木材など)を基本にすることで、参加者が安全・安心に使用できるようにします。 2, 当事者と関わる事で生まれる変化 障害の有無に限らず多様な参加者と共に創作することで、それぞれの参加者の持つ文化や個性を、アートを通して理解を深めるきっかけとなることを期待します。 また、ろう者が講師として参加者と関わることで、耳がきこえないことが「障害」ではなく、その感性を芸術表現に取り入れることで新しい表現に繋がっていくことを参加者に体験してもらいます。 実施場所は川崎市内の一大ターミナルポイントでもある武蔵小杉駅から徒歩5分に位置する。 また、「SDGsパートナーまつり」という、より良い未来を築くための志のある団体が集う場での開催により、参加者同士が影響を与えあい、他者理解の意識を高めあうことが期待されます。 3, 非言語アートを通して、地域の多文化交流を図る 人形劇とダンスのワークショップを通し、ことばを使わずに自己表現をする楽しみを体験してもらいます。手話や音声言語に限らない形でのコミュニケーションを実際に体験することで、参加者にも日常でのコミュニケーションのヒントにしてもらうことができると考えます。また、すべてのワークショップに手話通訳者がいることで、耳の聴こえない人でも安心して参加できる環境を整えます。また、聴覚障害者への配慮の必要性を発信することも期待されます。	

【次年度以降の展望】

- 1、ダンスと人形劇の協働は初の試みであり、今回の実施を通して、多様な参加者の個性をより生かせるような、ダンス×人形劇の可能性を今後も探りたい。また、多様な参加者・鑑賞者に対する必要なサポートや、障害のある方が参加するハードルを下げるにはどうするか、どう情報をとどけることができるのかなど、アクセシビリティについても情報を集め、今後の活動に生かしていきたい。
- 2、今回の企画をきっかけに、ダンスに限らず、川崎市内の音楽、絵画などの様なジャンルのパラアート団体とのコラボレーションを図り、川崎独自の障害者の参加する芸術活動を盛り上げていきたい
また、事業にゆるく関れるようなボランティアなど、多様な関わりかたの出来る協力者や理解者を地域に増やしていきたい。

【実施結果(成果)】

実施日時: 2024 年 10 月 12 日 (日) 14:00～17:00

場所: NEC 玉川事業所 ルネッサンスシティホール (川崎市、JR 向河原駅前)

対象: 障害の有無、年齢に関わらず、どなたでも。

参加費: 無料

アクセシビリティ: 第一部、第二部のワークショップともに手話通訳あり。

第二部の発表会に字幕入りの映像あり。

WS 参加人数: 30 人 (途中入退場含む)

発表会観客数: 65 人

講師: デフ・パペットシアター・ひとみ、藤平真梨 (ダンスンブル主宰)

<デフ・パペットシアター・ひとみ>

1980 年、現代人形劇センター内に結成され、以来、ろう者と聴者が協働し、ろう者の豊かな感性を得た新しい人形劇の創造をめざして活動。音声言語に頼らない、遣い手の身体を駆使した視覚的表現と、聴こえない人も体感し見て楽しめるように工夫された音作りを特色とする。世界でも珍しい職業劇団として、結成以来、日本全国約 650 地域での 3000 ステージ以上の上演や、アジアからヨーロッパまで多数の海外公演を行う。

<藤平真梨(ダンスンブル主宰)>

ダンサー・振付家・演出家

7 歳よりクラシックバレエを始め The Australian Conservatoire of Ballet 卒業。

帰国後 下村由理恵バレエアンサンブルに所属し年間多数の舞台に出演。退団後はコンテンポラリーダンサーとしてソロの活動を始め、舞台やギャラリー、路上等、世界 20 カ国にてサイトスペシフィックなパフォーマンスを行う。

自身が踊る以外にも「人の数だけ踊りがある」をモットーにダンスンブルを立ち上げ、多くの人が自己表現と非言語コミュニケーションを楽しむ場を展開中。舞台では総合演出を手掛ける。

主催者 デフ・パペットシアター・ひとみ (公益財団法人現代人形劇センター) HP

<http://deaf.puppet.or.jp/>

協働者 かわさき SDGs パートナーまつり HP

<https://sheer-soapwort-c01.notion.site/SDGs-2024-6bc23dccba974769b6d76de6bd58e1e6#86f5bb8fa3a94102898f95f00896b8c4>

チラシ作成数: 4,000 部

配付先:

神奈川県内・東京都内の特別支援学校、川崎市内わくわくプラザ・こども文化センター・図書館・民間学童

川崎市を中心とした、関東の福祉施設 (就労支援施設)、放課後等デイサービス

共同企画団体である、SDGs パートナーまつり実行委員会、ダンスンブルのほか、文化芸術団体、障害者支援団体 (手話サークルなど)、個人に広報を協力してもらう。

イベントサイトへ登録

その他、劇団ウェブサイト・SNS を中心に積極的に募集し、チラシを団体内外の公演折込や施設への配架、DM、メーリングリスト(500 件)等で呼びかける。

メディア掲載: 東京新聞

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/358569>

【実際の効果と課題】

【実際の効果について】

効果1, 参加者の個性を作品を通して肯定する

実施後のアンケートより以下のような意見があった。

「とても自由で楽しい時間でした。正解がない、求めない感じが子ども含め参加者たちをのびのびさせていた気がします。」

「気楽に参加出来る内容であったのが良かったです。人形作りでは、初めにお手本をやっていただけたのが助かりました。」

「自由に布を使って良い事がすごく楽しくて、他の参加者の方や、お子さん達のアイデアがユニークで、刺激をいっぱいもらいました。」

「ダンスに興味を持ち始めていたため、参加させていただきました。とても楽しいイベントで、子どもも大変喜んでおりました。」

今回人形劇やダンスが初体験の参加者が多かったものの、未就学児から大人まで幅広い年齢層が相互に影響を受けながら、自分の個性を追究した創作の場となった。

講師も積極的に、個々の参加者による発表の時間を持つなど、表現することの楽しさを全体で共有出来るワークショップだった。

効果2, 当事者と関わる事で生まれる変化

今回聾者が講師として参加するワークショップであったことで、参加者の意識の変化を期待した。実施後のアンケートより以下のように、今後のろう者ともっと話をしてみたい、知りたい、という意見が複数あった。

「今度お会いする時には、挨拶の手話の一つでも覚えて行きたいと思います。」

「手話がなかなか覚えられないけど、ダンスで簡単な手話が覚えられたらいいなあ。ワークショップのたびに積み重ねて行き、少しずつ手話のボキャブラリが増えそう。」

また、参加者の中には、積極的に作った人形を見せながら「見て！」とアピールしてろう者とのコミュニケーションを楽しむ姿があったり、以前劇団の人形劇を地域で見たのをきっかけに、ろうの芸術家と触れ合ってみたいと思ってワークショップに参加した親子もいた。

今回のワークショップを通して、障害に対する理解がより深まるきっかけとなったと考える。

効果3, 非言語アートを通して、地域の多文化交流を図る

第一部の人形作りのワークショップの進行は、ろう者が中心となり手話で内容を説明したり、人形の作り方のアドバイスを行った。参加者とのコミュニケーションは、手話通訳を介したコミュニケーションのほか、ボディランゲージを使って行った。

また、第二部のダンスワークショップでは、「海の中で泳いでいるイメージ」「草原の中で風を感じるイメージ」など、字幕付きのイメージ映像を観ながら参加者と自由に発想したダンスを行うことで、言葉にこだわらない表現によりのびのびと表現ができていた。

ダンスとのワークショップコラボは初めての取り組みであったが、事前の打ち合わせを重ねる中で、それぞれのジャンルの良い部分を共有し、新しい発想を展開できたことは大きな発見であった。今後、さらに発展した形での取り組みを行っていききたい。

その他の効果

・地域団体とのつながり

今回、地域の団体・アーティストとの協同により、地域課題を共有したり、自由なアイデアで意見交換を行ったことで、地域に寄り添ったより良い企画を考える上で、大きな効果があったと感じる。今回の企画が一過性のものではなく、今回をきっかけに、今後はより発展した企画につなげていきたいと考える。また、地域での活動を継続的に行うことで認知も広がり、多様な人が気軽に参加しやすくなっていくことに期待する。

・申し込み方法の工夫

申し込み方法の工夫がアクセシビリティの拡大につながる実感があった。

普段ワークショップ開催にあたっては、事前申し込み制で行うことが多かったが、今回事前申し込みと、当日参加の両方の申し込み方法を行った。

事前申し込みと当日参加の人数は同数程度だった。当日参加は子供連れが多く、参加のハードルが下がるのとお祭りならではの気軽さがあって良いと感じた。アンケートでも、事前申し込みでないことが良かったという意見もあった。今後、様々な事情により障害のある方にとっては事前の申込無しにすることで、参加のハードルを下げることに繋がると感じた

課題について

・WS の内容について

内容については満足度の高い感想が多かった。しかし中には小さな子供にとっては、第一部の人形作りワークショップでの布をむすぶ作業が難しいという声があった。今回は難しい作業は講師や保護者がサポートしながら行う対応を行ったが、今後は内容を工夫して行えればと考える。

逆に良かった点として、当初はより簡易化するために、キットを作成する案もあったが、参加者のより自由な発想を尊重するために、あえて制限を行わないことにした。それによって、大人も子どももそれぞれの個性が出る人形をつくり、発表することができた。

・ろう者とのコミュニケーションについて

当日の参加者の中には、ろう者と接するのが初めてで戸惑ってしまう参加者もいたので、ろう者とのコミュニケーションについては、「どのように聾者に呼びかけを行うと良いのか」の例の紹介や、簡単な手話（それ取って、手伝って、ありがとう、色、など）にも挑戦できるような、コミュニケーションボードなどがあるとより良かったと感じた。

・広報について

今回、障害者の施設や学校への広報を積極的に行った。しかし、障害のある方の参加は想定より少なかったと感じている。

広報時に手話動画での PR や、施設への直接訪問など、よりきめ細かい広報を行うことが大切であると反省した。

また、継続的な地域での活動により、多様な参加者へ情報が届きやすくなると考えるので、今後も地域での活動を継続して行っていきたい。